

倉地佑奈さん

音楽研究科 博士後期課程 音楽専攻

留学先：ヨーテボリ大学（スウェーデン）

留学期間：2022年8月～2023年1月



留学先の大学について

ヨーテボリ大学では、留学生向けのニュースレターが定期的に届いたり、ライティング講座が無料で受けられたりと、学生に対する様々なサポートがありました。授業の連絡やスケジュールを確認できるアプリもあり、システムが整っていて便利だと感じることも多かったです。教職員や学生の皆さんは、暖かい方ばかりでした。

留学実現のために努力した点

英語での書類作成に力を入れました。ヨーテボリ大学へ留学を申請するにあたり、これまでの経歴や作品をまとめた資料、モチベーションレターなどの提出が必要だったため、学内外の先生にご協力いただき、自身の実績や作風、留学の動機などが明確に伝わるよう、時間をかけて書類を作成しました。

留学先の授業について

ヨーテボリ大学では、複合的な芸術表現を学ぶ授業が多くありました。作曲以外の多様な専攻の学生と共同でパフォーマンスを作り上げたり、芸術と社会問題について議論をしたりと、日本では学んでこなかった新たな内容に取り組み、自身の作曲技法や研究のみならず、芸術についての総合的な知見を広げることができました。

留学中の日常生活について

ヨーテボリの治安は良く、街の人々も親切で、大きなトラブルには遭遇しませんでした。バスやトラムなど、交通手段も充実していました。日照時間が日本と大きく異なるため、冬場は体内時計を整えることが難しかったです。



留学中に努力した点

授業についていけるよう、毎授業、欠かすことなく予習復習を行いました。プレゼンテーションやレポートなどの課題には早い段階から取り組み、必要があればライティング講座を受講して、文章の添削をお願いしていました。授業によっては、他の学生が提出した課題や資料が公開されているため、それらを見て多角的な視点を養うことに努めました

留学で気づいた点

複数人で作品を制作する際のプロセスが、留学以前に経験してきたものと大きく異なることに気がきました。日本では、大まかな枠組みを作り、そこに肉付けするかたちで作品を構成したり、グループのメンバー一人ひとりが与えられた役割に集中したりすることが多かったように思います。一方でヨーテボリ大学での共同制作では、枠組みをしっかりと決めず即興的にアイデアを組み合わせたり、メンバーが役割に縛られず思い思いに意見を言い合ったりすることが多かったです。柔軟性や瞬発的な発想力を問われることが多く苦勞することもありましたが、新たな手法に挑戦することができ、良い経験になりました。

留学の成果

留学の成果を体現できた一つの例として、学期末にスウェーデンの Mölndal 市で行われた〈Paper Music〉というプロジェクトが挙げられます。このプロジェクトは、紙を用いた芸術表現のプロジェクトで、私を含むヨーテボリ大学作曲専攻の学生たちは、市の公共施設でパフォーマンスを行うことになりました。新聞紙やトイレトペーパーなどの様々な紙を、質感や触れた時に発生する音の特徴を考慮して用いたり、階段やバルコニーといった会場の構造を活かしたりして、共同でパフォーマンスを作り上げました。ヨーテボリ大学で学んできた複合的な芸術表現の知識や、共同制作の経験を集約し、一つの作品として発表することができたと思います。観客を聴覚的、そして視覚的に惹きつける大掛かりなパフォーマンスを考えることはこれが初めてであり、今後の創作の糧となる貴重な経験でした。

経験をどう生かすか

留学を経て、作曲家として社会へどのようにアプローチし、自身が活動する空間を形作っていくか、あるいは他者の空間に干渉していくかについて、深く考えることが増えました。例えば、大学の共同制作の場では、様々な専攻の学生が活発に意見を出し合い、それぞれの個性や強みを組み合わせて作品を制作していました。また、ジェンダーのような社会問題と芸術を絡めて考え、芸術を通して社会に何を訴えていくか、どのように意思を発信していくかを模索している学生も多くいました。さらに、スウェーデンは移民が多く、多様な人種の人々が生活しており、大学のみならず街中においても、社会の中に人それぞれの居場所を確保し、多様性を尊重することの重要性を考えさせられることが多々ありました。留学前は、与えられた環境下での活動が中心でしたが、このような意識の変化に基づき、より社会に根ざした作品作りや、作品発表の仕方の工夫を行い、芸術と社会を結ぶ新たな活動方針を追究していきたいです。